紫西会報

第44号
発行所
茨城県筑西市下中山590
茨城県立下館第一高等学校
紫西同窓会
TEL (0296) 24-6344㈹
FAX (0296) 25-4673
編集兼発行責任者
高野良則
印刷所　戸頃印刷所

創立90周年記念式典盛大に挙行される

創立九十周年記念特集

創立九十周年記念事業実行委員長

紫西同窓会長　中山喜一郎（三十一回卒）

九十年　伝統の重み　感じつつ　未来に向けて　夢を叶えよ

昨年十一月十六日、我が母校県立下館第一高等学校は創立九十周年を迎え、県教育庁役員、県教育委員、近隣高等学校及び中学校の校長先生始め、筑西市選出の県議会議員二名、筑西、櫻川市長等多くの来賓各位出席のもと盛大かつ厳粛に記念式典が挙行されました事、実行委員の一人として感謝致し心よりお喜び申し上げます。扨、還り見ます時、大正十二年（一九二三年）四月開校以来、九〇年数々の変遷がありましたが、中でも第二次大戦中の在校生達一八回―二二回卒業生は九十周年記念誌の始め数頁学徒動員等の記事にあります様に筆舌につくしがたきご苦労がありました。本当に頭が下がります。

現在は普通科のみの一学年二百八十名　全校生徒八百四十名の高等学校として倶楽部活動及び勉強に頑張っております。従いまして、ＬＬ教室の整備をはかり生徒達がより良い環境のもと勉学に励むことができますようにと、九十周年事業の一環として学習室の備品等も整えましたところ、生徒達が学習室からあふれんばかりの人気があり机の確保に競い合うそうです。誠に喜ばしいことです。

その様な環境の中、県西地区に下館一高ありと揺るぎ無い地位を確保しつつ発展しております。

九十周年式典の後、記念講演をして頂いた下館一高出身の東京大学名誉教授谷島賢二先生のお話にもありました様に、これからは世界各国の人達と仲良くコミュニケーションを取れる様、幅広い知識と教養を身につけ、特に英語の中でも英会話の勉強に力を注ぎ、世界をリードして行く日本国民になってほしいものです。

最近、文部科学省でも英語教育の重要性を感じ、小学校低学年より英語教科を取り入れる事になりました。

在校生諸君、強健なる身体を持ち、国際社会で活躍する幅広い人生を送ってほしいものです。

下館一高生教職員と同窓生の皆様の益々のご活躍とご健勝を記念して筆を置きます。

同窓会の役割（九十周年の記念事業を終えて）

同窓会副会長　稲見庄一（三十五回卒）

一月五日、会報への原稿作成が新年の事始めとなりました。扨、私事になりますが、「紫西同窓会」の副会長をお引き受けして十三年になります。役割を果たしたのだろうかと自問しては反省することが多い。母校に通算十年教師とし奉職し、多くの卒業生との出会いがあり、彼等の活躍も見聞している。副会長をお引き受けする際、同窓会の役員としてなら在校生に各界で奮闘・努力しておられる卒業生諸氏の生の声を届けられるのではないかと考えていたのです。しかし、その後、私は小山高専や流通経済大学に勤務し、多忙であったこともあり、その思いを実現させる努力を怠ってしまった。九十周年記念事業を検討している過程で、原点に立ち返り、卒業生諸氏の情報を収集し、在校生や大学にあって進路選択に悩める卒業生に提供する任を果たしたいと思うようになった。更に、在校生と先輩諸氏のとの対話する機会をつくりたいと思っている。その理由を以下に述べたい。

教育の最終目標が生徒一人一人の人格形成と自己実現にあることは誰もが考えている。しかし、その手立てを議論すると様々な意見があり、一様ではない。特に、キャリア形成の重要性が唱えられながら、その充実したカリキュラムの作成までには至っていないのが現状ではないだろうか。何故なら、高校教育が大学進学のための学力達成という直近の課題を担っているからである。これが重い課題で、時間がかかり、その検討への余裕を生まないのだろうと思う。しかし、受験直前になっても進路選択に迷う生徒が続出し、消極的な選択をせざるを得ない現状もあるのではないか。将来の職業選択を視野に入れた大学進学であってほしいのに。

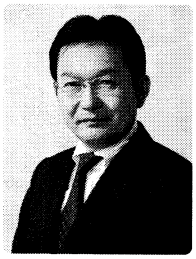
世界がグローバル化の一途を辿り、日本の伝統的なものの考え方が、ややもすると不利になるといわれている。相手に対して礼節をもって接するという、東洋思想は人間関係の基本で、それは真理であると私は確信している。問題が生じるのは、異文化に生きる人と接するにあたって、東洋思想の目指すものが障害になるのではなく、相手の育った文化や環境を充分理解しないでの出会いとなっているからではないだろうか。嘗て、私は文部科学省から海外視察（一九八八年）を命じられ、

創立九十周年を迎えて思うこと

下館一高PTA会長
石橋良章
（五十四回卒）

ヨーロッパの数カ国の教育者と会う機会を得た。会うなり、相手から日本文化への質問攻めにあった。彼等の日本文化への興味・関心の旺盛さに圧倒されたのと同時に、日本文化を十分説明できない自分に苛たった。日本文化の知識や教養が私には具わっていなかったのだ。彼等が視察に訪れた我々の処遇にも十分な配慮をしていたことにも驚かされた。国際交流にとっては、特に自己を確立し、説明責任を果たす心構えと、相手をよく知り、思いやる心が何より大切なのだろうと思う。

同窓会の中に組織を立ち上げ、様々な分野で活躍されている先輩諸氏の発掘と情報の収集にあたり、進路選択を迫られている諸君の支援への、一助となるような情報の提供をしたい。勿論、独断専行は許されないから、会に提案し、熟議してもらい、実行したい。



平成二五年一一月一六日、下館一高創立九十周年記念式典が多くのご来賓を初め、同窓会・PTA役員の皆様、生徒諸君のご参加をいただき、盛大に開催することができました。実行委員の一人として、心より感謝を申し上げます。

九〇年という長い年月の中の三年間を、私は下館一高で過ごしましたが、三年生時の担任だった井川省修先生からクラスに贈られた忘れられない言葉があります。それは、「正鵠を捉えよ」という言葉です。

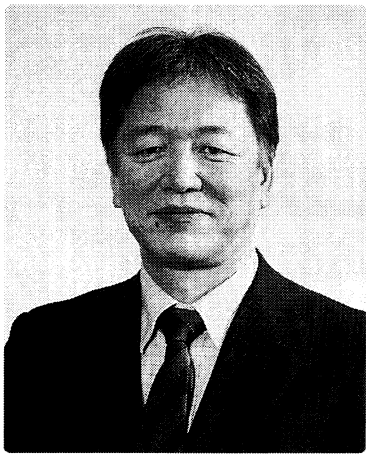
「正鵠」とは、広辞苑を引いてみると、「①弓の的の中央の黒ぼし。②ねらいどころ。物事の急所。要所。」とあります。物事には必ずねらいどころ、要所があるから、それをしっかりと掴みなさいということを、先生は、私たちに伝えたかったのだと思います。

教育の原点とは、ある世代が様々な経験をするなかで、人生を生き抜いていくために編み出した知恵を次の世代にも伝えるものだとある本で読みました。

人生の中では、多くの先輩が様々な言葉を伝えてくれます。人生の先輩からいただいた言葉を大切にするとともに、私たちの次の世代にも何か自分の経験した中で、意義ある言葉を伝えていきたいと思います。

ごあいさつ

校長 原篤範
（四十八回卒）



紫西同窓会会員の皆様には、常日頃から本校の教育活動にご協力、ご支援を頂きまして誠にありがとうございます。お陰をもちまして、生徒諸君は滞りなく日々の学習、部活動に邁進することができています。あらためて感謝申し上げます。

さて、平成二五年一一月一六日、創立九〇周年記念式典が開催され、滞りなく終了しましたことをご報告いたします。当日はご多忙中にもかかわらず多くの方々にご参集いただき感謝申し上げます。紫西同窓会の皆様にも多数ご出席いただき、ご満足いただけるものとなったかどうか甚だ心許ないのですが、この場をおかりしてお礼申し上げます。

九〇周年は生徒を主役として前面に出していこうと考えておりましたので、受付・案内、お茶席、吹奏楽、壁新聞と、できうる限り生徒の顔を見ていただきました。後輩たちの様子はどうでしたでしょうか。自立した逞しい人間として先輩の後に続いてくれればと思っています。以下は拙い式辞ではありますが、校長としての思いです。ご一読下さい。

今後とも、一〇〇周年に向けて、下館一高の日々の歩みにご声援いただければ幸いです。

式辞

厳しい冬の到来を忘れさせる暖かな日差しに包まれた今日の佳き日、多くの本校卒業生のご参集をいただくとともに、県議会議員設楽詠美子様、並びに鈴木聡様をはじめとする多数のご来賓の皆様、また、茨城県教育委員会教育次長柴原宏一様はじめ関係各位のご臨席を賜り、茨城県立下館第一高等学校創立九〇周年記念式典をかくも盛大に挙行できますことは、私ども職員、そして八四〇名の在校生にとりまして、この上ない慶びでございます。

これもひとえに、本日ご列席いただきました皆様の、本校教育活動への変わらぬご理解とご尽力の賜物と、深く感謝申し上げます。

本校は、大正一一年に下館商業学校として誕生して以来、幾多の変遷を経て、現在は全日制普通科のみを設置する高等学校となっております。昭和二三年の学制改革時には、普通科、商業科、工業科、そして定時制課程をも擁する総合高校であったことを考えれば、まさに隔世の感がいたします。昭和三七年に工業科が、四七年には商業科が募集停止となり、平成二十三年には定時制が六三年の永きに渡る歴史を閉じております。本校は地域の要望と期待に応えるかたちで、時代の変遷とともにその役割を変えながら九〇年の時を刻んで参りました。その間、二五、八〇四名の卒業生が、この地で学び、巣立ち、社会の有為な人材として各所